

<特集「情報標示の諸要素」>

[テーマ企画:特集 情報標示の諸要素]

まえがき

Foreword : Markers of information structure

風間 伸次郎

Shinjiro Kazama

東京外国語大学大学院総合国際学研究院
Tokyo University of Foreign Studies, Institute of Global Studies

キーワード: 主語卓越型言語, とりたて表現, 不定表現, 情報のなわ張り

Keywords: subject-prominent language, emphasizing expression, indefinite expression, informational territory

1. 企画に至った経緯

今号の特集は, 前回の特集「情報構造と名詞述語文」に内容的に連続するものである.

例年の方式に倣い, まず日本語による25の例文からなるアンケートを作成し, これに答えていただくことによって, 各言語のデータを収集することにした.

これにより17の言語に関するデータが集まった. これは東京外国語大学にある27専攻語のうちの11言語にフィンランド語, ハンガリー語, ダグール語, ナーナイ語, エウエン語, ウズベク語を加えたものとなっている. なおモンゴル語のデータはオラド方言とハルハ方言の2つの方言のデータからなっている.

これらの言語を語族別に見ると, まずフランス語, イタリア語, ポルトガル語, ロシア語, チェコ語, ペルシア語は印欧語族の言語である. エウエン語, ナーナイ語はツングース諸語, ダグール語, モンゴル語はモンゴル諸語, ウズベク語はチュルク諸語に属するが, これらは(系統ではなく)構造的な類似などの点からアルタイ諸言語としてまとめられることのある言語群である. フィンランド語とハンガリー語はウラル語族, エジプトアラビア語(以下では単に「アラビア語」とする)はアフロ・アジア語族の言語である. マレーシア語はオーストロネシア語族, 中国語は(異論もあるが)シナ・チベット語族, とされている. 朝鮮語, 日本語は系統的に孤立した言語とされている. なおアフリカ, オセアニア, カフカース, 新大陸などの諸言語のデータを欠いているため, 本稿での以下に展開される類型論的考察はなおきわめて不十分なものであることは否めない.

主題卓越型と主語卓越型の対立に関する Li and Thompson (1976) の研究は, 情報構造と統語構造の対立を類型論的な観点から捉えたもっとも著名な研究である. 次に, 主題標示要素「ハ」を含むとりたて表現の体系は, 特に日本語学において発展した情報構造の研究である. 不定表現は既知/未知, 定/不定, 特定/不特定, などの情報上の対立に関するもので, やはり近年類型論の分野で, 意味領域地図による通言語的研究の枠組みが提示されている. なわ張り理論は話し手と聞き手のもつ情報の帰属先に関する理論的研究で, 日本の研究者によって提案されたものである.

以上のような研究における情報標示の諸要素に関する研究に基づいて作成したのが, 以下のアンケート例文である.



本稿の著作権は著者が保持し, クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンス (CC-BY) 下に提供します.
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

1. 主題卓越型類型論の軸項について

[1] 「この土地は野菜がよく育つ。だから高い値段で売れるだろう。」【統語的に動詞の必須項ではない名詞の統語的軸項としての機能】

[2] 「私は頭が痛い。だから今日は休む。」【話し手のなわ張り内・聞き手のなわ張り外、統語的軸項としての機能】

2. とりたて表現について

[3] あの人**だけ**、時間通りに来た。【限定】

[4] これはここで**しか**買えない。【限定・否定との共起】

[5] その家にいたのは子供**ばかり**だった。【限定・多数】

[6] 次回**こそ**、失敗ないようにしよう。【限定・強調】

[7] 疲れたね、お茶**でも**飲もう。【反限定・例示】

[8] 水**さえ**あれば、数日間は大丈夫だ。【極端・意外】

[9] 小さい子供**まで**、その仕事の手伝いをさせられた。【極端・意外】

[10] 私はお金**なんか**欲しくない。【反極端・低評価】

[11] 自分の部屋**ぐらい**、自分できれいにしなさい。【反極端・最低限】

[12] 私**にも**ちょうだい。【類似・累加】

[13] お父さんもう帰って来たね。お母さんは？【反類似・対比（疑問）】

3. 不定表現について

[14] 「**誰か**（が）電話してきたよ。」【特定未知（specific unknown）】

[15] 「**誰か**に聞いてみよう。」【非現実不特定（irrealis non-specific）】

[16] 「私のいない間に**誰か**来た？」【疑問（question）】

[17] 「**誰か**来たら、私に教えてください。」【条件節内（conditional）】

[18] 「今日は**誰も**来るとは思わない。／今日は**誰も**来ないと思う。」

【間接（全部）否定（indirect negation）】

[19] 「そこには今**誰も**いないよ。」【直接（全部）否定（direct negation）】

[20] 「（それは）**誰でも**できる。」【自由選択（free-choice）】

[21] 「そんなこと（は）、**みんな**知っているんじゃないか!？」【自由選択を示す「みんな」】

[22] 「そんなもの、**誰が**買うんだよ!? 誰も買うわけじゃないか!」【反語】

4. なわ張り理論について

[23] 「君は英語がうまい**ね**。」【話し手のなわ張り内・聞き手のなわ張り内】

[24] 「君は退屈そうだ**ね**。」【話し手のなわ張り外・聞き手のなわ張り内】

[25] 「明日も寒いらしい**よ**。」【話し手のなわ張り外・聞き手のなわ張り外】

以下では、上記の4つの問題点とその理論的背景について、それぞれ節を立て、その問題点の所在について説明し、さらに今回のその調査結果についてまとめる。

2. 主題卓越型と主語卓越型の対立に関する類型論と統語的軸項について

2.1. 先行研究 — Li and Thompson (1976) —

Li and Thompson (1976) は、以下のような類型論的な分類を提案した。

- (a) 主語卓越の言語 (subject-prominent language) : 印欧語, ニジェール=コンゴ, フィン=ウゴル, セム, インドネシア語, マダガスカル語など
- (b) 主題卓越の言語 (topic-prominent language) 例: 中国語, ラフ語 (ロロ=ビルマ), リス語 (ロロ=ビルマ) など
- (c) 主語卓越であり, 主題卓越でもある言語 例: 日本語, 朝鮮語など
- (d) 主語卓越でもなく, 主題卓越でもない言語 例: タガログ語, イロカノ語 (フィリピン) など

こうした類型に分ける根拠, 各類型の示す特徴について述べられていることを要約する.

- ① (定である) 主題は文をまたいで続いていく (【筆者註】日本語の係助詞としての「ハ」が想起される).
- ② 主題は文頭に起こる.
- ③ 主題卓越の言語では, 主題の表層コーディング (標示) があるが, 主語の表層コーディングは必要ではない. 日本語と朝鮮語のような主語卓越・主題卓越の両方の特徴を持つ言語では, 主題と主語についてそれぞれの形態素標示を持っている.
- ④ 受動構文が主語卓越の言語ではよく用いられる. それに対して, 主題卓越の言語では, 受動化が現れない (たとえば, ラフ語, リス語), もしくは, たとえ受動化が現れるにしても, 周辺的な構造で現れ, 会話ではまれにしか用いられない (たとえば, 北京官話), あるいは特別な意味を持つ (たとえば, 日本語の「迷惑の受身」) ことがほとんどである. 主題卓越の言語において受動が相対的にあまり重要ではないことは, 次のように説明しうる. 主語卓越の言語における主語の概念は基本的なものであるので, もし動詞がその主語として指定する名詞以外の名詞が主語となる時, この動詞は義務的にこの非典型的な主語選択を示すためにマークされなければならない. これに対し, 主題卓越の言語においてはこのような操作を必要とせず任意の名詞を主題にすることができる.
- ⑤ 主語卓越の言語には, いわゆる代役主語 (It is raining. のit) があるが, 主題卓越の言語にはない.
- ⑥ あらゆる主題卓越の言語は, 「魚は鯛がおいしい」「私は頭が痛い」のようなタイプの二重主語文を持つ. こうした文の主題は動詞との選択関係をもたない. 純粋な主語卓越の言語はこのような文を持たない.
- ⑦ 主題卓越の言語では, 主題が統語的軸項 (pivot) として
那棵树叶子大, 所以我不喜欢_____。
Nèike shù yèzi dà, suǒyǐ wǒ bù xǐhuān _____. (nèike shù (that tree) が省略可能である)
“That tree (topic), the leaves are big, so I don’t like it.”
那块田稻子长得很大, 所以_____很值钱。
Nèi kuài tián dàozi zhǎngde hěn dà, suǒyǐ _____ hěn zhíqián. (nèi kuài tián (that piece of land) が省略可能である)
“That piece of land (topic), rice grows very big, so it (the land) is very valuable.”

最後に, この3類型は連続体をなしているとし, 下記の図を提示している.

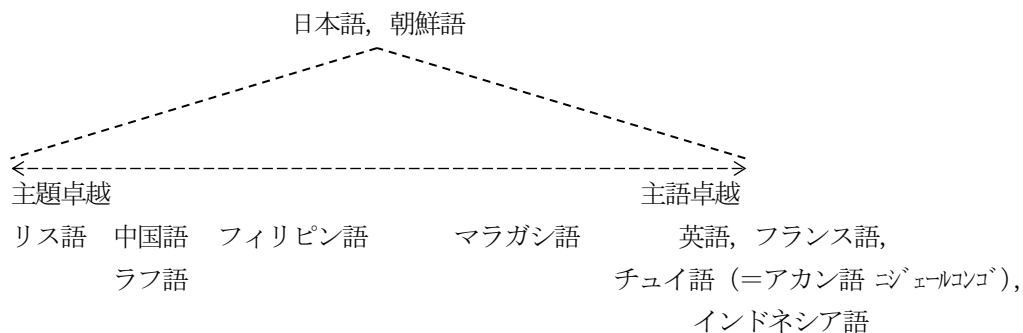


図 1: Li and Thompson (1976) における主語卓越と主題卓越の類型の概念図

2.2. アンケート例文のねらいと分析の基準、および調査結果

以下では若干のコメントを加えるとともに、今回のアンケート（以下本アンケートとする）で使用する文との関係を述べる。Li and Thompson (1976)は主語卓越対主題卓越の類型を提案してはいるものの、これを分類する客観的基準を示しているわけではなく、多くの言語についてどの類型に属するかを確定したわけでもない。複数挙げている基準のうち、どれが決定的な判断基準で、どれが副次的な判断基準であるとしてもしていない。3類型は連続的なものとしているので、各言語は複数あげている基準のどれくらいを満たすかによって、上記の図の特定の位置に位置づけられるものと考えられる。

上記の①については、昨年度のアンケートである程度検証した。

②、③については、本アンケートの多くの文で検証されるものとする。④については、本論集14号の受身特集で得られた例文を再検討することができる。⑤については、本論集16号の(20)明日は雨が降るそうだ、および19号の(17)b. 今日は寒い、を再検討することができる。さらに、存現文も主題が存在しない、もしくは場所が主題となるという点で情報構造の研究にとってきわめて重要であるが、これについては18号の所有・存在表現の特集で得られた例文を再検討することが可能である。ただし、このような④～⑤の分析に関しては今号で扱っていない。今後の課題とする。

⑥および⑦については今号の特集における下記のアンケート文で検討する（再掲）。

[1] 「この土地は野菜がよく育つ。だから高い値段で売れるだろう。」【統語的に動詞の必須項ではない名詞の統語的軸項としての機能】

[2] 「私は頭が痛い。だから今日は休む。」【話し手のなわ張り内・聞き手のなわ張り外、統語的軸項としての機能】

この2文に関して、次のような基準から分析し、対象となる言語を分類した。

基準 a. 二重主語文が現れ、その総主語／大主語（＝主題）が統語的軸項として機能する。

基準 b. 場所などを示す前置詞句など、いわば斜格項が主題的に機能し、統語的軸項として機能する。

基準 c. 主語でなければ統語的軸項になれない。

分類結果

A（基準 a を満たす言語）：ダグール語、中国語、朝鮮語

B（基準 b を満たす言語）：フィンランド語、ハンガリー語、マレーシア語、モンゴル語、ウズベク語

C（基準 c を満たす言語）：フランス語、イタリア語、ロシア語、アラビア語??

主語でなければ統語的軸項になれないCの言語は、（少し判断に問題のあるアラビア語を除いて）ヨーロッパの印欧語に偏っていることがわかる。逆に主題軸項型のAの言語は先行研究でもそうした位置づけがなされていた中国語をはじめ、東アジアの言語に偏っている。Bの言語群には特に偏りが見られないが、基準bとその分類結果に関しては今後のさらなる研究・考察が必要であると考えている。

Aのうち朝鮮語には主題を明示する要素がある。しかし日本語と異なり、主題が主語よりも必ず統語的軸項として優先されるとは限らない。[1]で日本語では「この土地には野菜が良く育つ。だから高い値段で売れるだろう」と「に」を加えても、依然主題の方が統語的軸項として優先的に解釈されるが、朝鮮語では位格を加えた場合、軸項は「土地」とも「野菜」とも解釈しうるといふ。

イタリア語のデータがもっともよく主語卓越型言語、つまりCの言語の特徴を示している。[1][2]の2例とも、1文目で「この土地は豊富な収穫を与える」「私は頭の痛みを持つ」のような表現を用いることによって、2文目の主語を1文目の主語に据えている。つまり、他の多くの言語では「土地」や「私」は斜格項

(場所格や属格) となっているのだが、これに対しイタリア語では、その意味役割が場所や持ち主である「土地」「私」を主語に据えることによって、2文目の主語に備えて1文目においてすでに統語的軸項を調整しているということである。

以下では、個別の各言語に関してさらに若干の考察を加える。

フランス語、イタリア語、ポルトガル語、ロシア語では、性の区別とそれによる人称代名詞の一致があり、[1]ではイタリア語を除くどの言語でも「土地」が女性名詞で1文目の斜格項であるため、2文目では女性の代名詞を明示して主語の交替を明示しなければならない(イタリア語では男性名詞だが、原理と状況は同じである)。ロシア語の[1]のデータには2文目で女性の代名詞を明示して主語の交替を明示しなければならないことが指摘されている。これを省略すれば、当然1文目で主格複数形で表れている *ovošči*「野菜(pl.)」が主語と解釈されてしまうからであろう。

フィンランド語およびハンガリー語の[2]においては、2文目で動詞の人称と数の標示があるため主語の転換はこれで明示される。

アラビア語の[1]は文意のまま訳されなかった。逆にこのことは話者が日本語の文さえも主語卓越型として解釈してしまったと言う事かもしれない。

ダグール語では、モンゴル語で許されないような二重主語文が([1][2]の両方において)成立している。したがってAに分類したが、その[2]は主語明示型の文とみるべきかもしれない。動詞にも人称標示がある。モンゴル語オラド方言の[2]にも二重主語文が現れている。

マレーシア語では二重主語文が許されないが、[1]で *(di) tanah ini*「この土地(で)」において前置詞 *di* が現れなければ、これは二重主語文に一步近づいたものとみることができよう(詳しくは各言語のデータを参照されたい)。

3. とりたてに関する対照研究

3.1. 先行研究 — 野田 (2015a), 野田 (2015b) を中心に

野田 (2015a)は、日本語が高コンテキスト言語で、英語が低コンテキスト言語だという通説がある、とした上で、これには反例も多くあり再検討が必要であることを述べている。さらに、次のように諸言語における「とりたて表現」の研究の必要性を唱えている。

今後、高コンテキスト言語と低コンテキスト言語に関連した研究を進展させていくためには「日本語は高コンテキスト言語で、英語などは低コンテキスト言語だ」という先入観を捨て、むしろそれとは反対のように見える言語現象を発掘していく必要がある。そうすれば、それぞれの言語でどんな部分を言語的に明示し、どんな部分をコンテキストに任せて聞き手に推論させているのかといった新しい枠組みでの研究が可能になる。新しい枠組みでの研究の可能性としては、たとえば「も」「さえ」「でも」のような「とりたて表現」の使い方が言語によってどう違うかを明らかにすることが考えられる。日本語の「とりたて表現」が表す意味は、次の表1のような体系にまとめることができる。

表1: 日本語のとりたて表現の意味の体系

	例		例
限定	「だけ」(限定), 「しか」(限定) など	反限定	「でも」(例示), 「も」(柔らげ) など
極端	「まで」(意外), 「さえ」(意外) など	反極端	「なんて」(低評価), 「ぐらい」(最低限) など
類似	「も」(類似)	反類似	「は」(対比)

この表1の左半分にある「限定」「極端」「類似」の意味を表すとりたて表現は、日本語でも、英語をはじめとするヨーロッパ諸語でも、同じように使われることが多い。(中略)

一方、表1の右半分にある「反限定」「反極端」「反類似」の意味を表すとりたて表現は、日本語では使われるが、英語をはじめとするヨーロッパ諸語ではあまり使われない。(中略) このように「限定」「極端」「類似」を表すとりたて表現は、日本語でもヨーロッパ諸語でも言語的に明示することが多い。それに対して「反限定」「反極端」「反類似」を表すとりたて表現は、日本語では言語的に明示することが多いが、ヨーロッパ諸語では言語的に明示しないで、コンテキストに任せて聞き手に推論させることが多いと言える。それぞれの言語で、どのようなときにどんなとりたて表現が使われ、どのようなときにどんなとりたて表現が使われないかについて、さらに詳しい研究が必要である。

野田 (2015a: 126-128, 表番号は改変した)

野田 (2015b) では、実際に日本語とスペイン語を対照し、上記のような仮説があてはまることを示している。

上記の点に関する検証については、下記の文を用いる (再掲)。

- [3] あの人**だけ**、時間通りに来た。【限定】
- [4] これはここで**しか**買えない。【限定・否定との共起】
- [5] その家にいたのは子供**ばかり**だった。【限定・多数】
- [6] 次回**こそ**、失敗ないようにしよう。【限定・強調】
- [7] 疲れたね、お茶**でも**飲もう。【反限定・例示】
- [8] 水**さえ**あれば、数日間は大丈夫だ。【極端・意外】
- [9] 小さい子供**まで**、その仕事の手伝いをさせられた。【極端・意外】
- [10] 私はお金**なんか**欲しくない。【反極端・低評価】
- [11] 自分の部屋**ぐらい**、自分できれいにしなさい。【反極端・最低限】
- [12] 私**にも**ちょうだい。【類似・累加】
- [13] お父さんもう帰って来たね。お母さんは？【反類似・対比 (疑問)】

アンケート例文では、表1にないとりたて助詞を2つ(「こそ」、「ばかり」)扱っているので、これらも含めて扱っている他の先行研究におけるとりたて助詞の体系を見ておく。日本語記述文法研究会(編)(2009: 4-8)では、次のように体系化している(今回の調査で扱っていない形式などは省略した)。

表2: 日本語記述文法研究会(編)のラベル付け

累加	も
対比	は
限定	だけ, しか, ばかり, こそ
極限	さえ, まで
評価	なんか, くらい
ぼかし	でも

沼田 (2000: 201) では次のように体系化している(詳しくは原著を参照されたい)。

表3: 沼田 (2000) によるラベル付けと体系化 (一部省略)

	意味	主張		主張と含みの関係	含み		
		断定	自者肯定		断定	自者肯定	他者肯定
も	単純他者肯定	+	+	カツ	+	/	+
でも	選択的例示	+	+	マタハ	+	/	+
さえ	最低条件	+	+	カツ	+	/	-不要
まで	意外	+	+	カツ	-	-	+
だけ	限定	+	+	カツ	+	/	-
ばかり	限定	+	+	カツ	+	/	-
しか	限定	+	-	カツ	+	/	+
こそ	特立	+	+	カツ	+	/	±
くらい	最低限	+	+	カツ	-	-	-
なんか	柔らげ	+	+	カツ	擬制	/	+
は	対比	+	+	カツ	+	/	対比

なお, マレーシア語のデータにおいて野元氏が記しているように, 少なくとも対比の「は」, 累加の「も」, 限定の「だけ」の3者は論理的に相反する事態を示す。

3.2. 調査結果

以下では得られたデータについての考察を, とりたての機能ごとにつくつかのグループに分け, それぞれに節を立てて述べていくことにする。なおその際, 当該言語の形式を示す場合には《 》内に, その形式に日本語もしくは英語で対応する意味 (のみ) を示す場合には, 「 」, “ ” 内に示すこととする。なお, メタ言語的な意味機能の説明のラベルであることを明示する際には, 【 】を用いている。

3.2.1. 【限定】の[3]「だけ」, [4]「しか」, [5]「ばかり」

まず限定の[3]「だけ」, [4]「しか」, [5]「ばかり」についてみると, どれも限定であるために, 同じ形式をまたがって用いる言語があるが, その状況は以下のように整理できる。

表4: 【限定】の調査結果

[3][4][5]の3つとも同じ	フランス語, イタリア語, ポルトガル語, ハンガリー語, ロシア語 ([5]では別の表現も可), チェコ語, 朝鮮語 ([4]では二重否定も可), ウズベク語, モンゴル語, エウエン語
[3][4]が同じ	ダグール語 (ただし[4]では修飾語の方に限定の要素がついている), ナーナイ語, マレーシア語
[3][5]が同じ	フィンランド語, ペルシア語
3つとも異なる	中国語, アラビア語

ウラル語族のフィンランド語を除けば, 全般的に見てヨーロッパの言語が3者の違いに比較的無関心な言語群であると言えそうである。アラビア語には分裂文 (名詞述語文) を好むかなり強い傾向があるように思える。典型的に日本語と大きく類似し地理的にも近いにもかかわらず, 朝鮮語では《=man》が広い意

味範囲を示し、日本語とはこの点で大きな異なりを見せている。「[4][5]が同じ」という言語がないのは、[3]がもっとも典型的な限定のケースであるためだろう。日本語では、[5]「その家にいたのは子供ばかりだった」の文において、「大人もいた」であろうことが含意されるが、アンケートを見る限り、このような意味が確実に含意される言語は少ないようだ。

以下では、個々の形式について観察された特徴や傾向を記しておく。

[3]「だけ」では、アラビア語のみならず、マレーシア語でも疑似分裂文が生じている。これに限らず、しばしば名詞述語文が観察されるので、アラビア語は一般に名詞述語文／コピュラ文による表現の比率が他言語に比べて高いように感じられる。

[4]「しか」は日本語では否定と呼応するものとして捉えられているが、例えば、「[4] これはここ**以外では**買えない（これはここ**でしか**買えない）」と「**以外では**」に言い換えられることを考えると、「しか」は二重否定につながりがある表現と捉えることもできよう。実際に[4]で二重否定が用いられた言語には、イタリア語、ポルトガル語、フィンランド語、ペルシア語、アラビア語、があった。フランス語は[3][4][5]のいずれにも二重否定を用いていた。ロマンス諸語は二重否定を好み、中でもフランス語はその傾向が最も強いと言えそうである。

[5]「ばかり」に関して、アラビア語とダグール語では“all”による表現が観察された。アラビア語で“all”が用いられるのは、上記のアラビア語の名詞述語文志向と関連があるものと考えられる。

3.2.2.[6]「こそ」

次に[6]「こそ」について考察する。日本語記述文法研究会（編）（2009: 4-8）では「こそ」を[3]「だけ」、[4]「しか」、[5]「ばかり」とともに【限定】として扱っているが、他者（寺村の言うとりたての「影」）が命題的に否定されない点で、この3者とは異なっている。「こそ」を限定に入れるのは誤りではないだろうか？ このことは次のような通言語的な調査結果からも支持される。すなわち、[3][4][5]と同じ形式が用いられる言語はモンゴル語¹だけで、他には無かった。他方、明示的な形式が用いられない言語が多い。

表5: 「こそ」の明示的な対応形式

形式の出ない言語	フランス語、朝鮮語、イタリア語、ポルトガル語、フィンランド語、ハンガリー語、中国語（副詞《一定》）、チェコ語、エウエン語、ペルシア語、マレーシア語
形式の出る言語	ウズベク語、ダグール語、ナーナイ語、ロシア語（もしくは後置語順）、アラビア語（文頭語順と「特に」）

フランス語や朝鮮語のデータでは、「主題化して文頭に置く」ことによって「こそ」の機能が果たされると書かれている。明示的な説明はなくとも、他の言語でもやはり文頭位置（さらには動詞直前位置）による主題化によってその機能が示されている言語は多いだろう。したがって「こそ」はむしろ対比の「は」や主題の「は」に近いものとして捉えるべきではないだろうか？

ダグール語とナーナイ語は同じ《=kaa》という付属語を用いている。両者は近隣の言語だが、系統的にはモンゴル諸語とツングース諸語であって系統を異にするので、この要素はおそらくダグール語がツングース（おそらくエウエンキー語アムール方言 cf. Bulatova (1987: 74)) から借用したものであろう。調査にお

¹ モンゴル語の「こそ」との対応形式は《=H》であるが、以下でも見るように[3][4][5][7][8]が同じくこの形式によるという、きわめて多機能で機能範囲の広い形式である。この形式の十全な意味記述は今後の課題である。

ける媒介言語の中国語／ロシア語にいずれにも出ていない要素であるのにも関わらず、現れた両言語の形式《=kaa》は貴重な記録であると考えられる。

3.2.3. 【極端】[8]「さえ」、[9]「まで」

次に、ともに極端（意外）／極限（意外）などとされている[8]「さえ」、[9]「まで」をみる。沼田（2000）は「さえ」に【最低条件】、「まで」に【意外】という異なったラベルをつけて区別していた。

まず、[9]「まで」の対応形式はあるが、[8]「さえ」に対応する明示的な形式が現れない言語にフランス語、イタリア語、チェコ語がある。いずれもヨーロッパの印欧語である。これらの言語における[9]「まで」には英語の“even”のような意の形式が現れる。[9]に現れる形式がなぜ[8]では使えないのか、その違いの決め手となる点は何か、については、フランス語のデータの稿に考察があるので参照されたい。

[8]「水さえあれば、数日間は大丈夫だ」という文は、「? 水だけあれば、数日間は大丈夫だ」のように言い換えても、少し変にはなるが近い意味は実現できる（ただし「最低限」という話者の評価のニュアンスは失われる、以上筆者の内省による）。したがって「さえ」は「だけ」など限定に近いものと考えられるが、実際に[3]の限定の形式と同じ形式が用いられる言語に、ポルトガル語、フィンランド語、ペルシア語、アラビア語、ナーナイ語、朝鮮語がある。ロシア語とエウエン語は限定の形式と仮定法が組み合わせられている。

他の「さえ」の対応形式には、焦点となる動詞直前位置によるハンガリー語、「何もないならば」という表現によるウズベク語、上述の多機能な《=I》によるモンゴル語、「少なくとも」／「～である限り」によるマレーシア語などがある。

[9]「小さい子供まで、その仕事の手伝いをさせられた」では、やはり極端のニュアンスは失われるが、「小さい子供も、その仕事の手伝いをさせられた」と言い換えてもかなり近い意味を実現できる。したがって「も」【累加】に近いと考えられるが、実際に[12]「も」と同じ対応形式の現れる言語（ハンガリー語、モンゴル語、ナーナイ語）が観察された。「も」に何らかの強調要素（“even”、“まで”など）が加えられた表現を使う言語（エウエン語、ウズベク語、マレーシア語）も観察された。他には“all”によるダグール語、日本語と同じように格助詞としても用いられる「まで」を用いる朝鮮語がある。

3.2.4. 【類似／累加】の[12]「も」

【類似／累加】とされる[12]「も」では、どの言語でも明示的な対応形式が観察された。ただしその品詞は副詞のものが多く、日本語の「も」に比べると音形も長く、独立性も高そうであり、日本語の「も」より文法化していない印象を受ける。

3.2.5. 【反限定／選択的例示／ぼかし】の[7]「でも」

以下では、野田（2015a）が「日本語では言語的に明示されるが、ヨーロッパ諸語では明示的な形式が現れない（要約）」と指摘していた反限定、反極端、反類似、についてみる。野田（2015a）は、系統を特に問題にせず「ヨーロッパ諸語」としている点や、日本語と類似した類型論的特徴を示す北東アジアの諸言語などを視野に入れていない点が残念だが、今回の調査はこうした問題点にも一定の答を出してくれることが期待される。

まず【反限定／選択的例示／ぼかし】などとされる[7]「でも」に関して、たしかにイタリア語、ポルトガル語でも明示的な形式が現れない。ただし不定冠詞が若干それに近い働きをしている可能性は考えられる。ハンガリー語のデータではそのような説明が明記されている。中国語の量詞《（一）杯》とペルシア語「一つ」もこれに類似した要素として考えてよいだろう。さらに、“or (something)”のような表現による言語には、フランス語、マレーシア語、アラビア語、ナーナイ語がある。もっと変わったものとして、動詞の瞬

間相アスペクトによるエウエン語がある。なおチェコ語は全く違う表現になってしまっているため、分析不能である。

これらに対し、明示的表現を用いる言語には、フィンランド語、ロシア語、モンゴル語ハルハ方言（上記の《=I》）、朝鮮語（「も」）がある。ウズベク語とモンゴル語オラド方言、ダグール語では反響語（echo-word）によって示される。反響語とは、チュルク諸語とモンゴル諸語（今回の調査に該当言語が無いがさらに南アジアの諸言語）に広く見られるもので、語頭子音を m などに替えてから語全体を後ろに重複することによって形成されるものである。日本語においてもたとえば「お茶か何かない!？」とか「何やらかんやら」などの表現は形式・機能の両面においてこれに近いものと考えられる。明示的表現を持つ言語においては、その6言語のうち4言語が北東／中央アジアのいわゆる「アルタイ型言語」（亀井・河野・千野（編）（1996: 28-29））であることがわかる。

3.2.6. 【反極端】の[10]「なんか」、[11]「ぐらい」

【反極端／評価／柔らげ】とされる[10]「なんか」の明示的対応形式を持たないのは、フランス語、イタリア語、ポルトガル語、ペルシア語、アラビア語、ナーナイ語、である。このうちナーナイ語は媒介言語であるロシア語の影響を受けた可能性がある。これとアラビア語を除くと、残りは印欧語族の言語であり、ロマンス諸語の言語は3つとも含まれていることがわかる。

他方、[10]「なんか」の明示的対応形式を持つのは、エウエン語（[9]【極端・意外】と同じ形式）、ハンガリー語（「も」の否定）、朝鮮語（依存名詞《ttawi》）、フィンランド語（「何も」）、チェコ語（強調否定辞“none of”）、である。ただしフィンランド語やチェコ語の形式は完全に文法化したものとは言えないかもしれない（なお、上記の諸形式は、より文法要素的性格が強いと思われる言語から順に示してみた）。さらに反限定におけると同様に、ここでもウズベク語、モンゴル語、ダグール語では反響語による表現が可能である。文法化した要素ではないが、中国語では副詞「全く」、ロシア語では迂言的表現もしくは語順、マレーシア語では“or the like”“or anything at all”のような表現によって[10]「なんか」のニュアンスを示している。

ここでも明示的対応形式を持たない言語は印欧語や西アジアのアラビア語に偏っており（ナーナイ語はやはり媒介言語ロシア語で明示的対応形式がないことに影響された可能性がある）、明示的対応形式を持つ言語はウラル諸語、アルタイ諸語、朝鮮語、および東アジアの中国語、マレーシア語などに偏っていることがわかる。

[11]「ぐらい」の明示的対応形式を全く示さないのは、ポルトガル語、チェコ語、ナーナイ語、ダグール語で、大部分の言語は「少なくとも」（フランス語、イタリア語、フィンランド語、ロシア語、アラビア語、中国語），“as far as”（マレーシア語），“again”（ペルシア語）、「何もないならば」（ウズベク語）、のように具体的で語彙的／分析的な表現（つまり文法化していない表現）を用いている。

他方、[11]「ぐらい」の明示的対応形式を示すのは、エウエン語、朝鮮語（「程度は」）である。いずれも東アジアのアルタイ型言語ではあるが、他のとりたてに比べると、文法化した形式を示す言語が少ない。もっとも日本語の「なんか」や「ぐらい」も音形は長く、十分に文法化した要素とは言えないかもしれない。

3.2.7. 【反類似・対比】の[13]「は」

【反類似・対比】とされる[13]「は」の明示的対応形式を全く示さない言語には、まずフランス語、ポルトガル語、アラビア語があり、これらの言語では“and”が対比のニュアンスを示すのに若干機能しているとみることができる。ペルシア語、ダグール語も対応形式はないが、具体的に述語がさらに補われている。

他方、明示的対応形式を示すのは、朝鮮語、ウズベク語、エウエン語、ナーナイ語（[6]「こそ」と同じ

要素), マレーシア語, フィンランド語 (ただし疑問文でのみ), である。

スラブ系言語であるロシア語とチェコ語には対比接続詞《a》というものがあり, これは“and”とも似た面を持つが, 日本語の「は」の対比の機能を能く実現するものとみてよい。イタリア語の《invece》「一方で」はより具体的で語彙的な要素だが, 機能的にはこれに近いものとみてよいものかもしれない。

他には, 中国語で省略疑問文を形成する《呢》, (語順がもっぱら情報構造の明示に用いられる) ハンガリー語での文頭位置による対比がある。

3.2.8. 「とりたて」についての調査結果のまとめと考察

まず野田 (2015b) の仮説についての検証からはじめる。たしかにヨーロッパ諸語には反限定, 反極端, 反類似の明示的形式を持たない言語が多い。しかし, ヨーロッパでもウラル語族の言語や印欧語でもスラブ系の言語などはある程度対応する形式を示すようだ。他方, 東アジアの言語, 特に日本語との類型的な類似を示すアルタイ諸言語や朝鮮語には反限定, 反極端, 反類似の諸形式を持つものが多いと言える。特にモンゴル諸語とチュルク諸語では反極端・反類似に特化した反響語という形態的手法がある点で特徴的である。

しかし, 反限定, 反極端, 反類似以外でも, 例えば[6]「こそ」の対応形式を持つ言語は一般に少ない。極端についても, 限定や類似 (／累加) の形式によって示される言語が多く, 話し手による評価を特に言語化しない言語が多く存在する。

こうした状況はどのような理由によるものであろうか? まず, 対比と限定と累加の3つはもっとも基本的なものと考えられる。論理的にも互いに対立する (上述, 論理式については, マレーシア語のデータの2節を参照されたい)。対比は主題に近いための, 明示的な形式を持たない言語が多いが, 限定と累加の形式はどの言語にも存在する。これに対し, 「こそ」は3.2.2. でみたように多くの言語で単に (主に文頭の) 主題として表現されることが多く, 主題に近い機能を持つものと考えられる。さらに, 「しか」「ばかり」は限定と同形, 「まで」は累加と同形で表現されることが多い。つまり, 日本語以外の (とくにヨーロッパの) 言語では論理的な適用範囲のみを表示することが多く, 話者の評価を問題にしないことが多いようだ。この点に関して今後のさらなる実証的研究が必要であり, またなぜそうなのか, その理由を解明してゆく必要があると考える。

日本語に類型論的に近く, また地理的にも近い諸言語 (朝鮮語やアルタイ諸言語を中心とするアルタイ型言語) では, 日本語同様, とりたての要素はもっぱら主に名詞につく付属語として現れている。これらの要素は概ね文法化しており, 音形は短く意味は抽象的である。これに対し, ヨーロッパの言語では副詞や分析的／迂言的表現など, より独立性が高く, 文法化していない語彙的な要素に依っていることが多い。これはSOV語順などの他の特徴と関わっている可能性が考えられるが, なお明らかでない。その解明も今後の課題としたい。

4. 不定代名詞

4.1. 不定代名詞に関する言語類型論的な先行研究 —Haspelmath (1997, 2005)—

Haspelmath (1997) は不定代名詞に関する通言語的研究であり, 100の言語を対象に不定表現を研究した。Haspelmath (1997) の4.4節には, 40の言語を対象に下記のような意味領域地図／含意的配置図 (implicational map) が提案されている (以下では含意的配置図という用語の方を用いる)。

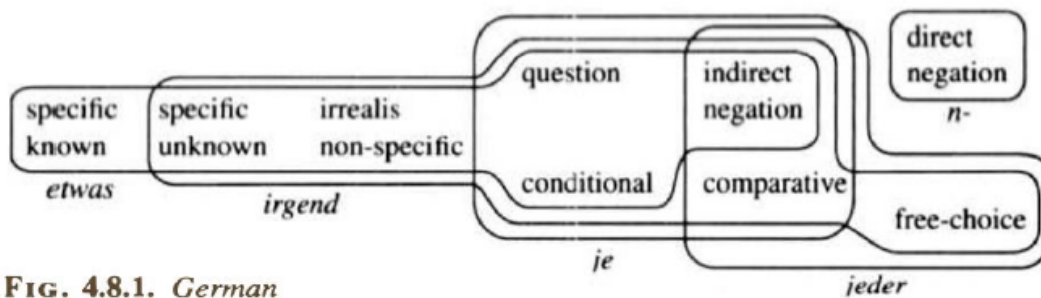


FIG. 4.8.1. German

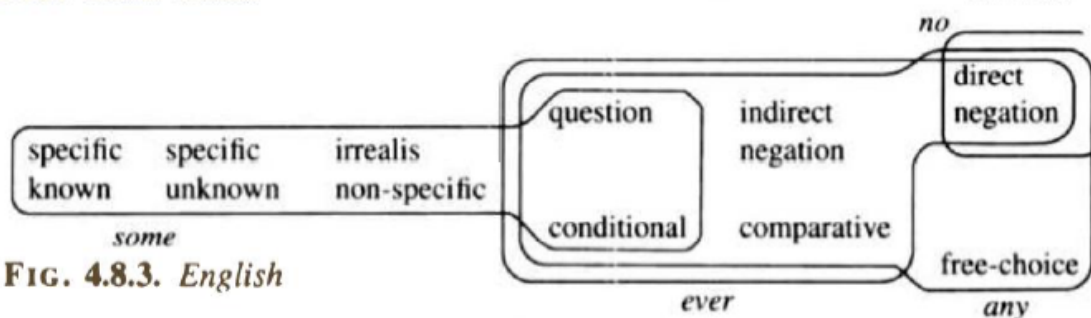


FIG. 4.8.3. English

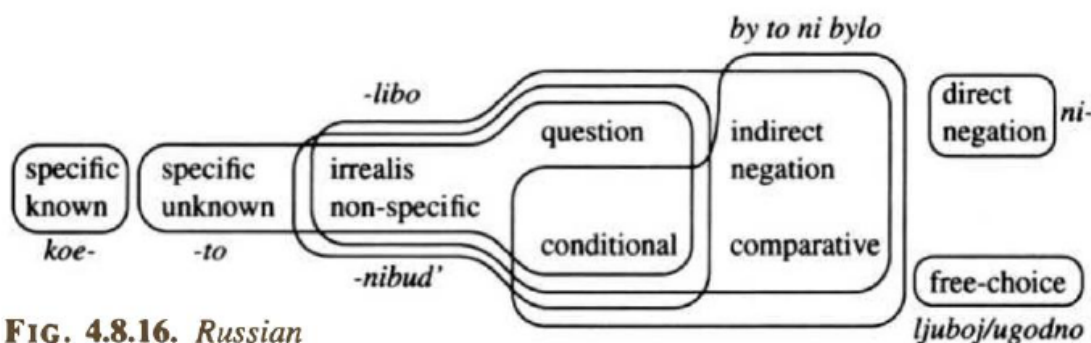


FIG. 4.8.16. Russian

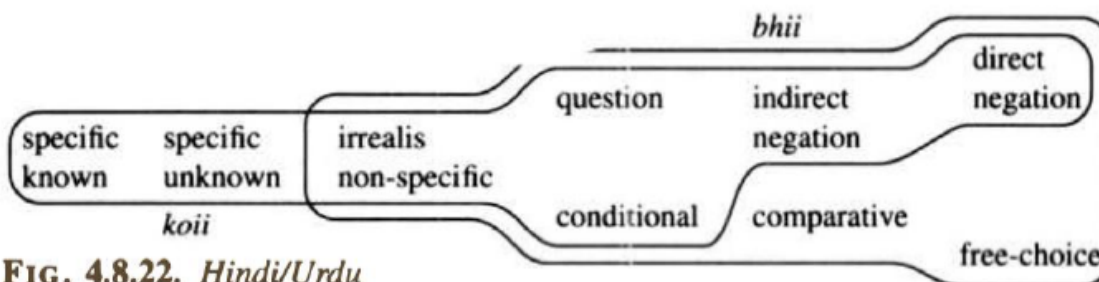
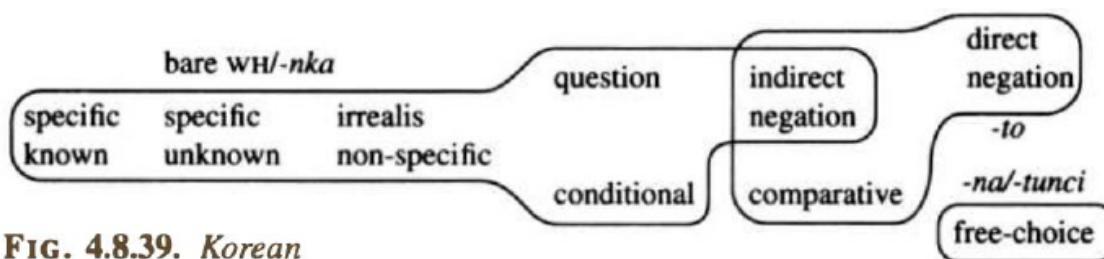
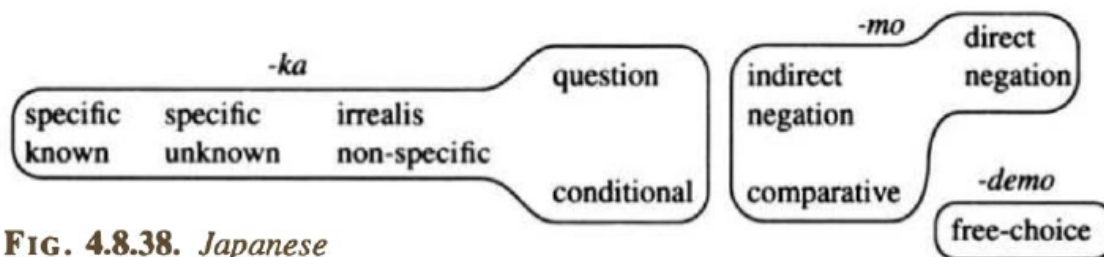
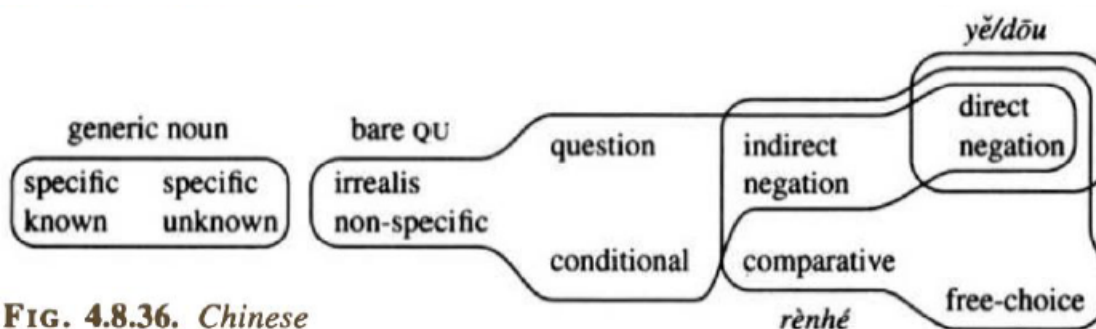


FIG. 4.8.22. Hindi/Urdu



Haspelmath (2005) では 326 の言語について調べ、それらは次のような基準で分類している。以下は Haspelmath (2005: 195) より拙訳により要約して示す。

ここでは ‘somebody’ ‘something’ のような不定代名詞を取り扱う。一方において、不定代名詞は「誰」「何」のような疑問代名詞と近い関係を持っている。ロシア語では kto-to 「誰か」と čto-to 「何か」は kto 「誰」と čto 「何」から不定の接尾辞 -to により派生される。他方で、不定代名詞は「人」や「物」のような汎称的名詞 (generic nouns) と近い関係を持っている。ペルシア語において、「誰か」は kæs-i [人 - 不定接尾辞] のように、「何か」は čiz-i [もの - 接尾辞] で表現される。この二つの主要なタイプに加えて、何とも関係のない他の特別な表現 (special expressions) によって「誰か」や「何か」を示す言語が存在する。例えばアブハズ語 (北西コーカサス) では、「誰か」は aʃə, 「何か」は akʷə となる。理論上は指示代名詞から不定が派生されるようなさらなる別のタイプが推定されるものの、他のタイプは見つかっていない。

「誰か」と「何か」が違った振舞いを見せる混合したタイプを示す言語もある。例えば、クメール語では「誰か」は「人」と訳される kè: であり neak na: 「誰」とは無関係であるが、「何か」は「何」ʔvɔy と近い関係にある ʔvɔy (-mú:əy) である。

最後に、いくつかの言語は名詞的な不定代名詞が完全に欠けていて、「誰か」と「何か」の対

応する内容は**存在の構造** (existential construction) によって表現される。

(中略)

2つの主要なタイプの地理的分布ははっきりしている。アフリカのほとんど全ての言語は汎称的名詞起源の不定代名詞を持ち、ほとんどのニューギニアおよび太平洋の諸島の言語もまたそうである。これに対し、北アメリカ、オーストラリア、ユーラシア（西の縁を除く）は圧倒的に疑問詞起源の不定代名詞を示す。「特別な不定代名詞」のタイプはユーラシア全体に散らばっており、混合タイプははっきりした分布を示さない。これは言語の系統から完全に独立し、大陸規模の地理的分布を示す特徴のうちの一つの好例である。

Feature 46A: Indefinite Pronouns



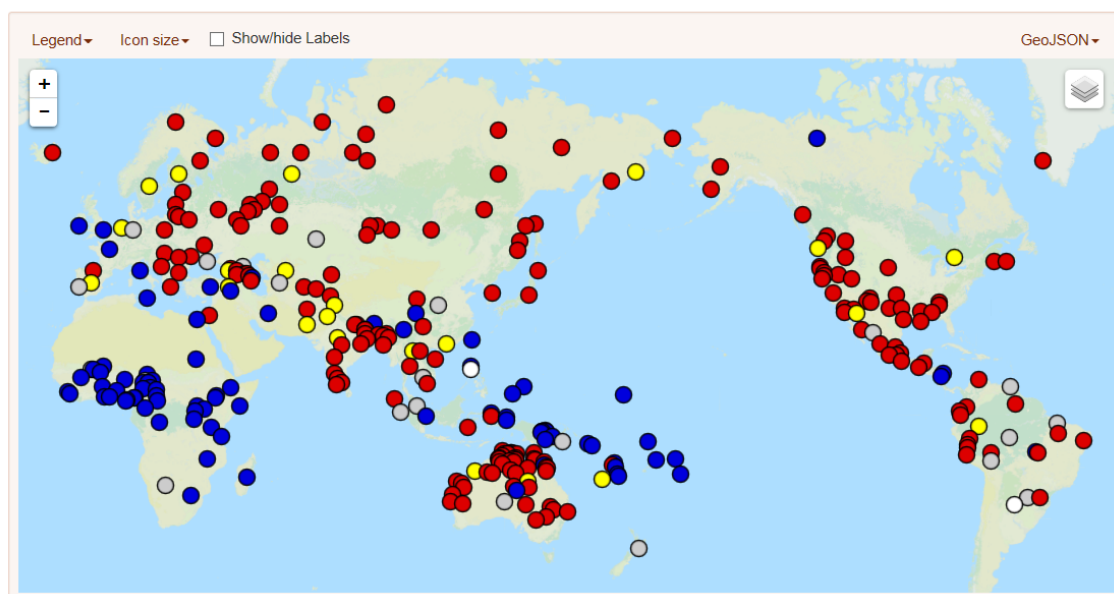
This feature is described in the text of chapter 46 Indefinite Pronouns by Martin Haspelmath cite

You may combine this feature with another one. Start typing the feature name or number in the field below.

46A: Indefinite Pronouns Submit

Values

● Interrogative-based	194
● Generic-noun-based	85
● Special	22
● Mixed	23
○ Existential construction	2



<http://wals.info/feature/46A#2/28.3/152.4> (最終確認日：2015/12/16)

風間 (2003: 290-291) では不定表現と全部否定について若干の考察を行った。以下にその内容を示す（一部省略した）。

トルコ語での不定表現は基本的に疑問詞とは形の上での関連が無く、bir「1」で不定を表現し、モンゴル語では疑問詞によってその不定表現は異なるが、疑問詞と нэг「1」を構成要素としている点では共通している。朝鮮語では疑問詞がそのまま不定表現に用いられる。漢語及びさらにその南方の諸言語ではこのように疑問表現と不定表現が形の上で区別されないという。

トルコ語では「誰もいない」は kimse yok (kimは「誰」、kimseは「誰か、ある人」) のように表現されるが、一般に全部否定の表現では、ペルシャ語起源の hiç を用い、疑問詞及び疑問詞派生の語を用いない。モンゴル語では日本語同様、「何も～ない」「誰も～いない」といった全部否定の場

合には、やはり[疑問詞+「も」に類似した機能の付属語]を用いて示す。ツングース諸語も同様である。朝鮮語ではこうした全部否定の場合、疑問詞より派生した語は使われず、'amu「誰(か)、誰(も)」から'amu-ges「何(か)、何(も)」や'amu-dei「どこ(か)、どこ(にも)」, 'amu-ddai「いつ(か)、いつ(でも)」が派生した形になっている点で特異である(nugu「誰」, mu'es「何」, 'edi「どこ」, 'enjei「いつ」)。

Haspelmath(1997)の7章では、通時的にみた不定代名詞の来源について、次の5つを提示している：

- ① 疑問代名詞／汎称代名詞／数詞の「1」に数量焦点小辞(scalar focus particle, 「も、さえ、まで」／“also, even, at least”)を加えるもの(Haspelmath(1997)7.1.)
- ② 同じく「か」／“or”を加えるもの(Haspelmath(1997)7.2.)
- ③ 疑問代名詞そのままの形(Haspelmath(1997)7.3.)
- ④ 重複によるもの(Haspelmath(1997)7.4.)
- ⑤ その他(Haspelmath(1997)7.5.)

この類型のうち①は、次にみるとりたて(モなどを含んでいる)の研究とつながっている。

さらに、否定の不定代名詞の問題がある。英語などでは、Nobody came. のように全部否定の否定要素は名詞の側に現れるが、日本語では「誰も来なかった」のように動詞の側に標示される。Haspelmath(1997:193-194)では、否定の不定代名詞に関する表現として、次の4つのタイプを示している(()内は筆者による)。

- (a) Verbal negation plus (ordinary) indefinite (= “not some(body)” 型)
- (b) Verbal negation plus ‘special indefinite’ (= “not any(body)” 型)
- (c) Verbal negation plus ‘negative indefinite’ (= “not no(body)” 型)
- (d) ‘Negative indefinite’ without verbal negation (= “no(body)” 型)

以上の先行研究の分析を踏まえ、今回集まった言語データにおける不定代名詞の現れを確認・検証する。不定表現に関連する調査例文は次の様なものである(再掲)。

- [14] 「誰か(が)電話してきたよ。」【特定未知(specific unknown)】²
- [15] 「誰かに聞いてみよう。」【非現実不特定(irrealis non-specific)】
- [16] 「私のいない間に誰か来た？」【疑問(question)】
- [17] 「誰か来たら、私に教えてください。」【条件節内(conditional)】
- [18] 「今日は誰も来るとは思わない。／今日は誰も来ないと思う。」
【間接(全部)否定(indirect negation)】
- [19] 「そこには今誰もいないよ。」【直接(全部)否定(direct negation)】
- [20] 「(それは)誰でもできる。」【自由選択(free-choice)】
- [21] 「そんなこと(は)、みんな知っているんじゃないか!？」【自由選択を示す「みんな」】
- [22] 「そんなもの、誰が買うんだよ! 誰も買うわけじゃないか!」【反語】

Haspelmath(1997)と比べると、【特定既知(specific known)】と【comparative】がなく、【自由選択を示す

² 筆者は最初この例を【特定既知】の例と勘違いしていたが、正確には【特定未知】であった。この点について野元氏より御教示をいただいた。他にも有益なコメントや情報を下さった野元氏にお礼申し上げたい。ただし、さらなる誤謬等は全て筆者の責に帰するものである。

「みんな」(all)と【反語(irony)】がつけ加えられた形になっている。

	14	15	16 question	18 indirect	19 direct	22 irony
specific	specific	irrealis		negation	negation	
known	unknown	non-specific				
			17 conditional	comparative	20 free-choice	21 all

図2: Haspelmath (1997) と含意的配置図と本稿の調査項目の関係

なお, Haspelmath (1997) の4.4節にすでに含意的配置図が提示されている40言語のうち, 今回データが集まった言語のうちすでに分析されているものは, フランス語, イタリア語, ポルトガル語, ロシア語, フィンランド語, ハンガリー語, ペルシア語, ナーナイ語, 中国語, 朝鮮語, (日本語), の10言語である。他方, 含意的配置図がないのはチェコ語, アラビア語, ウズベク語, モンゴル語, ダグール語, エウエン語, マレーシア語, の7言語である。

4.2. 調査結果

4.2.1. 否定の不定表現

ここでは, [18]【間接(全部)否定(indirect negation)】と[19]【直接(全部)否定(direct negation)】に現れた形式を, 上記 Haspelmath (1997: 193-194) の4分類に照らして分類してみた。

(a) “not some(body)”型: モンゴル語, ダグール語, アラビア語, ペルシア語, エウエン語, 中国語(ただし[19]は「一人も〜いない」, ナーナイ語)

(b) “not any(body)”型: フランス語, フィンランド語, 朝鮮語, マレーシア語, ウズベク語

(c) “not no(body)”型: イタリア語, ポルトガル語, ハンガリー語, ロシア語, チェコ語,

(d) “no(body)”型: なし

実際の分類に当たっては, (b) と (c) の判別に際して少し問題があった。そこでは, 肯定とは異なる不定要素が現れた場合, 否定辞と関連のある形をしていれば, (c) に, 関係のない形をしていれば (b) に分類した。(c) の地理的分布が顕著で, 全てヨーロッパの言語である。ハンガリー語を除き, 系統的には全て印欧語である。

なお, イタリア語とポルトガル語, ハンガリー語, ロシア語の[18]では, 主節に否定辞が現れる場合に不定代名詞が, 従属節に否定が現れる場合に否定代名詞が現れる。対してフィンランド語では, いずれにも否定代名詞が現れる。

4.2.2. 間接否定表現

ここでは, [18]「今日は誰も来るとは思わない。/今日は誰も来ないと思う。」【間接(全部)否定(indirect negation)】に関して, 前者の日本語文に即した表現が現れるか, 後者か, もしくは両方の表現が可能かについての結果を整理した。もちろん話者の方が, 「あまり使わないな」と思いつつ機械的に逐語的に翻訳した, というケースもあったかもしれないので, 間違いなくその言語の文法を反映しているかは定かではない。ただ, 先入観なく訳したものだけに, 逆に一つの資料として有効であろうと思う。

- ・もっぱら「今日は誰も来るとは思わない」を使う: アラビア語, ペルシア語
- ・もっぱら「今日は誰も来ないと思う」を使う: チェコ語, ウズベク語, ナーナイ語, ダグール語, 朝鮮語, 中国語

・両方使う：フランス語, イタリア語, ポルトガル語, ロシア語, ハンガリー語, フィンランド語, モンゴル語, エウエン語, マレーシア語

結果にはかなりはっきりした偏りが認められる。上位節に否定を使う言語は西アジアの2言語であり, 下位節に否定を使う言語はチェコ語を除きアルタイ諸言語や東アジアの言語である。ヨーロッパの言語はチェコ語を除き全部両方使う言語に入っている。ただ, なぜこのような分布を示すのかについて, 現時点でお筆者には説明できない。

4.2.3. 自由選択を示す「みんな」

ここでは, [21]【自由選択を示す「みんな」(all)】に関して, “all (~) / every (~)” の対応表現を使うのか, それ以外の表現を使うのかについて整理した。

・“all (~) / every (~)”：フランス語, イタリア語, フィンランド語, チェコ語, ペルシア語, アラビア語, モンゴル語, ウズベク語, ナーナイ語, マレーシア語, 中国語

・“all (~) / every (~)” でない：ハンガリー語 (《minden「すべての」-ki「誰」》), ロシア語 (ljuboj / kto ugodno “anyone”=[20]), 朝鮮語 (nwukwu-na「誰でも」=[20], nwukwu-tun(ci)「誰でも」), ダグール語 (anii=č “who=ever”=[20]), エウエン語 (ŋii=wut “who=indef” ≠[20]),

“all (~) / every (~)” でない形式を用いる言語の形式は, 基本的にどれも疑問代名詞に基づく不定代名詞である。ただしその言語群にはっきりした地理的・系統的な偏りは見いだせない。

なお, 今回は[22]【反語 (irony)】に関しても調査したが, どの言語も疑問詞を用いた一種の疑問文を用いており (もちろん, 接続法や強調辞の若干の使用は見られるが), 疑問とは全く異なった表現をとる言語は一つも観察できなかった。

4.2.4. Haspelmath (1997) が含意的配置図を示していない言語の調査結果

マレーシア語に関しては, データの方に完全な含意的配置図が示されているため, ここでは取り扱わない。紙面の都合と技術的な問題から, アンケートの例文番号を用い簡略化した形で以下の6言語の含意的配置図を示す。

- ・チェコ語：[[14][15][16][17]] někdo [[18][19]] nikdo [[20]] každ-
- ・アラビア語：[[14][15][16][17][18][19][20]] ħadd
- ・ウズベク語：[[14][15][16][17]] kim=dir [[18][19]] hech kim [[20]] har bir odam
- ・モンゴル語：[[14][15][16][17]] xün [[18][19][20]] xen=č
- ・ダグール語：[14]? [[15][16][17]] kuu [[18][19][20]] anii=č
- ・エウエン語：
[14] ŋii=wut [15] ŋii=də [16] ŋii=də=wul [17][18][19]ŋii=də [20] ŋii=wul

同じスラブ系のロシア語と比べると, チェコ語の含意的配置図はかなり単純である (他方で, ウズベク語の含意配置図と同じになっている)。もっともこれは言語の違いによるのか, 調査の方法上の問題点に起因するのか, 不明である。いくつかの形式について, どれが使用可能でどれが使用不可能であるのか, もっと丁寧に調べればもう少し違った結果が得られるかもしれない。

アラビア語における ħadd はかなり万能の形式/意味範囲の広い形式であることがわかる。モンゴル語

とダグール語はやはり系統的に同じモンゴル諸語に属す言語であるため、分布・形式ともによく似た配置図を示している。エウエン語では [15] と [17][18][19] $\eta i i=d \partial$ が、[16] の $\eta i i=d \partial=w \partial$ に分断されており、含意的配置図の主旨からは問題となる分布になっている。付属語の意味・機能について今後のより深い研究が必要である。

総じて、[14]-[17]と[18]-[20]の間に大きな境界のあることがわかる。

4.2.5. 日本語における「だれ+数量焦点小辞」にみられる「ゆれ」

分析の途中で、日本語の「だれ+数量焦点小辞」の構成に関して、あることに気づいたのでここで記しておく。なお日本語学・国語学の文献を丁寧に調べたわけではないので、もしかするとすでに指摘されていることかもしれない。その場合はご容赦願いたい。

日本語で同じように疑問詞から（広い意味での）不定表現を形成する「か」と「も」であるが（「だれ=か」、「だれ=も」）、格に関してその出現分布は異なっている。すなわち、だれかが／だれかを／だれかに／だれかから、…と「か」には格が後接するのに対して、だれをも（後述）／だれにも／だれでも／だれからも（／*だれがも）のように「も」では格がその前に現れる。これは「も」が係助詞であるためだと説明されるかもしれないが、係助詞の客観的定義のために分布を用いるということになれば、その説明はややトートロジーであるということになる。他方、「だれか」は、Haspelmath (1997) が含意的配置図の一番左の方を示すので、特定既知の人物、つまりかなり具体的な現実の人物を示しうるので、「その人」のような一般名詞と同じように扱われ、格はその後ろにつくのだと説明できるかもしれない。

しかし、「だれもが」という形式があり、これは格が「も」の後ろについている。そしてこの場合、「だれもが」は肯定文で使われ、「みんな」のような意味 (Haspelmath (1997) のいう free choice に近い意味であろう) を実現している（例えば、「だれもが知っている」≒「みんなが知っている」。他方、「だれにも／だれからも」は主に否定とともに用いられるようだ（この点に関しては下記で再び取り上げる）。

ここで試しに「だれをも／だれにも／だれもから」を国立国語研究所の現代書き言葉均衡コーパス (BCCWJ) から少納言を使って検索してみると、「だれをも／だれもから」には1例のヒットもないが、「だれにも」は3例見つかる。そのどれも「みんなに」と置き換えることができる（筆者の内省による）。

- ・そしてそれは、当日その場にいた観客の**だれにも**に共通することにちがいない。
- ・**だれにも**に真実を語ることを求めるならば、自分が真実を語るべきである。
- ・信号灯たちは、ちょっと考えました。信号灯ほど**だれにも**に見つめられる仕事はありません。

なお、「だれがも」が不可であることは、「は」や「も」の前で格助詞が落ちるものとして説明されており、「だれをも」も同様に不可であると思われるが、実際に検索してみると6例見つかる。そのうちの5例は「**だれをも**信ずることができず、」のように否定とともに用いられているが、肯定の例も1件見いだされた。

・これは、心霊写真の検証をする人たちの論争にも似ている。**だれをも**納得させうる、説明のつかない奇怪なものがはっきりと写しだされていないかぎり、

実例は見いだせなかったが、このような場合、口語でなら例えば、「そのメンバーの**だれをも**納得させるものだった」のような表現も言えそうである（筆者の内省による）。同じく、「だれからも」にも「**だれからも**尊敬されていました」のように肯定文中での例が見つかるが、やはりこのように「みんな」の意味である場合、「そのメンバーの**だれもから**尊敬されていたのです」のような表現ができそうである（同じく筆者の内省による）。

Haspelmath (1997) の日本語の含意的配置図では (in)direct negation / comparative を -mo とし, free choice を -demo としているが, これは「だれでもできる」のような例に基づくものだろう. ただこれも「だれもができる (ことだ)」のように言い換えることが可能であり, -mo は free choice の領域にも若干進出しているとみるべきであろう (「だれもが」と「だれでも」の間にはさらに若干の意味や共起する形式の違いがあるようだが, 現時点では筆者はまだその解明に至っていない).

以上の観察を, 日本語における「だれ+数量焦点小辞」にみられる「ゆれ」として報告しておく.

5. 情報のなわ張り理論

5.1. 情報のなわ張り理論についての先行研究 —神尾 (1990)—

高見 (2015) は神尾 (1990) の簡略かつ的確なまとめとなっているので, これを以下に引用する.

情報のなわ張り理論は, 神尾昭雄によって提唱された語用論に関する理論で, 情報が, 話し手や聞き手の誰に帰属するか, つまり, 誰の「なわ張り」にあるかによって表現形式が異なることを明示したものである. 「私は兵庫県出身です」のような確定的, 断言的文型を〈直接形〉, 「彼女は多分来るだろう」のような不確定な文型を〈間接形〉とすると, 情報が話し手, 聞き手のなわ張りの内にあるか外にあるかによって, 次の4つの表現形式が用いられる.

		話し手のなわ張り	
		内	外
聞き手の なわ張り	外	A : 直接形	D : 間接形
	内	B : 直接ね形	C : 間接ね形

A は, 情報が話し手のなわ張りにのみ属し, 「私は頭が痛い/主人は来週パリに行きます」のような〈直接形〉が用いられる. B は, 情報が話し手と聞き手の両方のなわ張りに属し, 「いい天気ですね/君はフランス語がうまいね」のような〈直接ね形〉が用いられる. 一方 C は, 情報が聞き手のなわ張りにのみ属し, 「君は退屈そうだね/係長は出張のようですね」のような〈間接ね形〉が用いられ, D は, 情報が話し手と聞き手のどちらのなわ張りにも属さず, 「明日も暑いらしいよ/彼はもう退院したんじゃない」のような〈間接形〉が用いられる (英語では, A, B が〈直接形〉, C, D が〈間接形〉で表現される).

これについて日本語・英語以外の言語についてもその表現を検討し, 日本語と同じタイプを示すのか, 英語と同じタイプを示すのか, いずれとも異なるタイプを示すのかについて検討することにした. その例文は下記である (再掲).

- [2] 「私は頭が痛い. だから今日は休む。」【話し手のなわ張り内・聞き手のなわ張り外, 統語的軸項としての機能】 (再掲)
- [23] 「君は英語がうまいね。」【話し手のなわ張り内・聞き手のなわ張り内】
- [24] 「君は退屈そうだね。」【話し手のなわ張り外・聞き手のなわ張り内】
- [25] 「明日も寒いらしいよ。」【話し手のなわ張り外・聞き手のなわ張り外】

英語と日本語の違いは, 英語では話し手のなわ張りに属するか否かのみを問題にするのに対し, 日本語では話し手のみならず聞き手のなわ張りに属するか否かも問題にする点であるといえよう. 英語が問題に

するのは、話し手にとっての情報の入手経路であり、いわゆる証拠性 (evidentiality) であるといえる。

今回の調査では、上記の4つの文において (実際には、特に[23]において)、【 】の意味の違いを示す何らかの形式が現れているか否かによって、対象言語を2つに分類した。

- ・英語型：フランス語、イタリア語、ポルトガル語、ロシア語、チェコ語、ハンガリー語、アラビア語、中国語、エウエン語
- ・日本語型：フィンランド語、**朝鮮語**、モンゴル語、ウズベク語、**マレーシア語**

判断の難しいもの：ダグール語、ペルシア語、ナーナイ語

全般に英語型の言語が多く、[24]で「～のように見える」、[25]では伝聞や推量など、証拠性にかかわる形式が現れ、それらの文の情報が話し手のなわ張りには属していないことを明示している。[24]で証拠性らしき形式が現れていないのはナーナイ語だけであった。やはり「退屈だ」という心情は話し手にしか直接体験できず、外見的にも判断が難しいため、何らかの形式を伴うのがふつうであることがわかる。したがって、英語型であるか日本語型であるかの決め手は、[23]に何らかの形式が現れるかどうかにかかっている。

イタリア語、チェコ語の[23]ではそれぞれ *veramente* 「本当に」、*fakt* “really” という語彙的な副詞が日本語の「ね」にあたるニュアンスをある程度伝えている可能性がある。ロシア語の[23]でも、*ved'* 「だって、まったく、たしかに、本当に」を用いて「ね」のニュアンスを出すことが可能であるという。ロシア語を媒介言語としてデータを得たエウエン語における *umakič* 「そんな (に)」も同様である。逆に見れば、「ね」のニュアンスは他の言語ではせいぜいこのような要素でしか伝達できず、日本語に見られるような「念押し」の機能を示す終助詞のような要素の使用は通言語的にはあまり一般的ではないことがわかる。

フィンランド語では、日本語の「ね」に対して *hAn* と *pA* が用いられるが、両者は聞き手への語りかけの度合いによって使い分けられており、文全体の語調によっては用いられないこともあると言う点で注意が必要である。ハンガリー語の[24]に現れている *ugye* 「ですよね?」は、情報の入手経路を示す形式ではなく、同意を求める形式となっている。チェコ語の *nebo co?* “or what” もこれに近い。この点でこれらの言語におけるこれらの形式は、機能面で「ね」に近いものとみてよいだろう。逆に、朝鮮語は日本語型に分類したものの、[23]と[24]に共通して現れる要素は、*-kwuna* 「知覚・推論によって得た情報を新たに知る」および *-ney* 「現在の近くから得た情報を新たに知る」で、どちらも情報の入手に関する形式であって聞き手に確認を求める類のものではない。

ウズベク語の *=a*、マレーシア語の *-lah* は日本語の「ね」に近い機能を示す要素であるようだ。ただし *=a* は[23]にのみ、*-lah* は[23]、[24]、[25]の3つともに現れている。日本語との類似、という観点から言えば、[23]、[24]に同じ文末要素が現れる点で、上記分類に太字で示した朝鮮語とマレーシア語がもっとも日本語に似ていると言えるだろう。ただし朝鮮語の文末要素は上述のように日本語の「ね」とはその機能が大きく異なる。

[23]に関して、ペルシア語の文末の間投詞 *hā*、ダグール語の文末の強調辞 *=ee* が「ね」のニュアンスを表しているのか、どの程度必須の要素なのか、が問題であり、これによって両言語の位置づけは違ってくる (筆者には十分な判断ができなかった)。モンゴル語 (ハルハ方言) の[23] *=yum=aa* および *=tee* は「ね」のようなニュアンスを示すものと判断したが、なお検討を要する。

上述のようにナーナイ語は、[24]に証拠性等の明示的な要素がないばかりでなく、[23]にも特に明示的な要素は現れない。したがって厳密に言えば上記の2タイプとはさらに別のタイプということになる。ただし *sii ǎiniǎ paixapsilaa biǎci*. 「今日は 君は やや退屈 だね」のような表現になっており、別の日の状態と比べることによって「退屈であること」を外見的に捉えられるものとして表現しているのかもしれない。

系統のおよび地域的には、はっきりとした偏りは見いだせない。ヨーロッパにおける印欧語族の言語はいずれも英語型で、日本語型の言語がない点は指摘しておくに値するかもしれない。

6. 反省点と今後の課題

4節の不定代名詞に関しては、筆者が Haspelmath (1997) を十分に消化しきれていなかったため、あまり意図が明確でない調査となってしまった。データを作成して下さった研究者の皆様にはお詫び申上げたい。

ヨーロッパの印欧語の傾向として提示するには、ロマンス諸語とスラブ諸語のデータがあるものの、まずドイツ語をはじめとするゲルマン系の言語のデータがなかった点が大きな問題であろう。他方、アジア側でもビルマ語など、系統の異なる SOV 語順のデータがあればより説得力のある考察になったのではないかと考える。今後の号で、補遺としてこれらの言語のデータが加わることを期待したい。

参考文献

- Bulatova, N. Ja. (1987) *Govory evenkov Amurskoj oblasti*. Leningrad: Izd. Nauka.
橋本萬太郎 (1981) 『現代博言学』 東京：大修館書店
Haspelmath, Martin (1997) *Indefinite Pronouns*. Oxford: Oxford University Press.
Haspelmath, Martin (2005) Indefinite Pronouns. Haspelmath et al. (eds.) *World Atlas of Language Structures*. 190-193. Oxford: Oxford University Press.
亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編) (1996) 『言語学大辞典 第6巻 術語編』 東京：三省堂
風間伸次郎 (2003) 「アルタイ諸言語の3グループ(チュルク・モンゴル・ツングース)及び朝鮮語、日本語の文法は本当に似ているのか—対照文法の試み」アレキサンダー・ボビン・長田俊樹 (共編) 『日本語系統論の現在』 日文研叢書 31: 249-340. 京都：国際日本文化研究センター。
神尾昭雄 (1990) 『情報のなわ張り理論』 東京：大修館書店。
Li, C. N. and S. A. Thompson (1976) Subject and topic: a new typology of language. In C. N. Li (ed.) *Subject and topic*. 457-489. New York: Academic Press.
日本語記述文法研究会 (編) (2009) 『現代日本語文法 5 第9部 とりたて 第10部 主題』 東京：くろしお出版
野田尚史 (2015a) 「第5章 世界の言語研究に貢献できる日本語文法研究とその可能性 — 「する」言語と「なる」言語、高コンテキスト言語と低コンテキスト言語の再検討を中心に—」 益岡隆志 (編) 『日本語研究とその可能性』 106-132. 東京：開拓社。
野田尚史 (2015b) 「日本語とスペイン語のとりたて表現の意味体系」 『日本語文法』 5-2. 82-97.
沼田善子 (2000) 「3 とりたて」 『日本語の文法 2 時・否定と取り立て』 151-216. 岩波書店
高見健一 (2015) 「情報のなわ張り理論」 斎藤純男・田口善久・西村義樹 (編) 『明解言語学辞典』 120. 東京：三省堂。

執筆者連絡先: kazamas@tufs.ac.jp